

ESAO (European Society for Artificial Organs) 51st annual congress 参加印象記

国立循環器病研究センター研究所

馬原 淳

Atsushi MAHARA



第51回ヨーロッパ人工臓器学会 (European Society for Artificial Organs, ESAO) 大会が、オランダ・エンスヘーデにあるトゥウェンテ大学 (University of Twente) の TechMed センター (図1) にて、2025年6月25日～28日に開催された。ESAOが連携している International Federation for Artificial Organs (IFAO) のセッションにおいて、筆者は日本人工臓器学会 (JSAO) からの参加者として、セッションチェアを務めるとともに講演する機会を頂いた。

エンスヘーデは、オランダの首都アムステルダムから電車で2時間ほど移動したドイツ国境に近いオランダ東部の都市である。梅雨の日本を出発して、涼しく快適なヨーロッパの気候を期待して現地に赴いたが、残念ながら現地も温暖化の影響を受けて非常に蒸し暑く、日中の最高気温は30℃を超す日が続いていた。トゥウェンテ大学は緑に囲まれた森の中にある。その近くに学会が斡旋するホテルがあり、筆者はそこに宿泊した。歴史を感じる古き良き建物であり、色とりどりの花が植えられたとても綺麗なホテルであった。しかし、大きな問題は、ホテルの部屋には暖房器具があっても冷房器具はないことがある。また、この時期のオランダは日没も遅く、夜の9時頃まで日が差している。このため、窓を全開にして扇風機にあたりながら夜を過ごすという、とても懐かしい雰囲気を味わうことができた。

さて、本題であるESAO 2025の印象について、幾つかご報告させて頂きたい(図2)。まず、初日となるオープニングセレモニーから印象深いものとなった。というのも、学会会場から200 kmほど離れたオランダ・バーゲでは、北



図1 トゥウェンテ大学 (University of Twente) の TechMed センター

大西洋条約機構 (NATO) の首脳会談が同時期に開催され、米国大統領をはじめ各国の要人たちが世界で生じているさまざまな問題について会議をしていました。このような背景から開会式の冒頭、大会長である Dimitrios Stamatialis 先生は、「世界にはさまざまな問題があり、とても重要な時代にさしかかっている。さらにAIが普及して、世界中には事実だけでなくフェイクニュースもあふれており、ますます混迷を深めている。しかし、ESAOではサイエンスを追求する。真実に基づくサイエンスが最も大事である。この点を改めて認識し、未来に進むことが最も重要である」という趣旨のスピーチをされ、参加者からの熱い拍手によって本会が幕開けとなった。

引き続いて、ネフロロジー、血液透析の分野で非常にご高名な Stephen R. Ash 先生の講演を拝聴することができた。達成してきた偉業も素晴らしいが、特に印象に残ったのは、多くの失敗を重ねてきた事実やその理由を淡々と

■著者連絡先

国立循環器病研究センター研究所
(〒564-8565 大阪府吹田市岸部新町6-1)
E-mail. mahara@ncvc.go.jp



図2 学会会場内に設置されたESAO 2025のシンボルと交流スペース

説明しながら、チャレンジすることの重要さを熱く語っておられる姿勢である。このようなご講演では、達成された成功事例に関して紹介される場合が多いが、重鎮となる先生方が包み隠さず失敗談についてご講演されている姿にとても感銘を受けた。

ESAO 2025は、セッション、シンポジウム、ポスター発表を中心とする100件を超える演題で構成されていた。本会全体の印象的としては、Bioengineeringのセッションや発表がとても多かった点が挙げられる。人工臓器学会では通常、体外式膜型人工肺(ECMO)や補助人工心臓など臨床と直結するようなテーマは非常に重要なものとして取り扱われる。一方で、Bioengineering研究の成果は臨床現場へ直結しない場合が多いため、未来で利用される技術として捉えられる。ESAO 2025では、そういったチャレンジングな研



図3 トゥウェンテ大学(University of Twente)

究テーマにも大きく焦点を当ててプログラムが編成されていたのは、大会長であるDimitrios Stamatialis先生が開会式冒頭で述べられた「未来に向かって進む」という在り方を、具体的に示したものではないかと感じた。また、筆者が参加させて頂いたIFAOセッションでも、フランス、中国、米国から招かれた研究者が最新の基礎研究を報告されており、この点においても基礎的なサイエンスに重きが置かれている本大会の方針を感じた。

学会会場であったトゥウェンテ大学は、前述のように木々があふれ、近代的な建物や花々に囲まれたとても平和的な環境の中にあり(図3)、日常の喧騒を忘れてリラックスしながら学会を楽しむことができた。JSAOとは色々な点で異なる雰囲気があり、比較的小規模でアットホームな雰囲気であったのも興味深かった。このような学会に参加し、人工臓器の新たな未来に向けて遠い日本でもBioengineering研究を実施していることを、少しでも多くの方々に知つてもらう良い機会だと改めて認識できた。

最後に、このような機会を与えて頂いた先生方に深く感謝を申し上げます。

本稿の著者には規定されたCOIはない。

